

沖縄の旬な情報と人をご紹介しますラジオ番組のフリーペーパー

paperRADIO

Free

ハイサイ! ウチナ〜タイム!



No.24
3
2018



吉戸 三貴 よしど みき

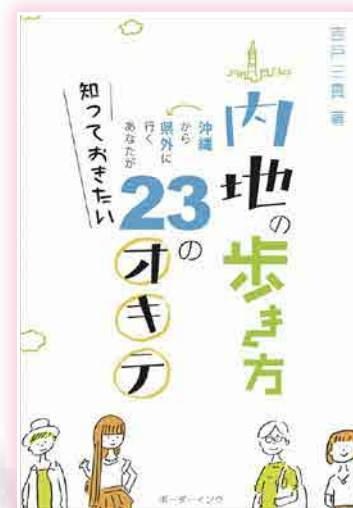
コミュニケーションスタイリスト
／株式会社スチール代表取締役
沖縄県那覇市生まれ。
慶應大学卒業後、県の奨学金でパリに留学。帰国後 PR の世界へ。
美ら海水族館広報、東京での PR ブランナー経験をへて、企業や個人のコミュニケーション課題の解決を行う株式会社スチールを設立。
沖縄・東京を拠点に、PR コンサルティング、ブランディングなどを行う。
国内外での講演のほか、コミュニケーション関連本の執筆も。

【第 307 回】スタジオゲスト

3 月 21 日(水) 再放送 24 日(土)

コミュニケーションスタイリスト

吉戸 三貴



内地の歩き方
沖縄から県外に行くあなたが
知っておきたい 23 のオキテ
吉戸三貴 著 出版社 ボーダーインク
四六判 160 ページ
定価 (本体 1500 円+税)

ラジオの聞き方

スマートフォンで聴く場合、アプリは不要!!
パソコンと同じ URL をスマホからアクセスするだけで聴けます。

<https://fm-odawara.com>

毎週水曜 19:00~20:00 再放送 毎週土曜 18:00~19:00



ハイサイ!
ウチナータイム!

FM おだわら

で検索!

FM 78.7MHz
おだわら
<http://fm-odawara.com/>



琉球パフォーマンスコネクション

皆さん、最近の極寒の中、ご自愛していますか？
最近の沖縄もでーじ寒くて、近年稀にみるさむーい沖縄を体験しています。
さあ！そんな中、今回はホットな話を記事にしたいと思います！
なんと!!わたくし!!、でーじお気に入りのお店を発見しました!!
お気に入りにはあまり紹介したくないのですが。笑

ぜひ皆様にも遊びに行ってもらいたいなーと思います。
ちなみに、店長、オーナー、スタッフ、全ての関係者と私との間に癒着はございません。笑
ほんと、たまたま入ったお店が気持ち良すぎて純粋に紹介したいだけです。笑
そんな気になるお店の名前はこちらっ！
「COFFEE&BAR VERONA (ペローナ)」でございます！



「ペローナ 那覇市」で検索！
那覇市松尾 2-11-13-1
12時～24時（不定休）

分飲み放題に加えて、12分コースもあります。
ビールからウイスキー、サングリア、カクテル豊富。フードも300円～500円ぐらいのリーズナブルさ。もはや、行きたい理由が見当たらない。笑
もちろん、エスプレッソ、カフェラテなどのコーヒーも飲みちゃうので、一人でカウンターでゆっくりもOK！仲間とテーブルで飲み会もOK！
店内にはインスタ映え間違いのないフォトスポットも！
国際通り牧志公設市場隣にあるのでアクセスも良好！
ぜひ、沖縄来れる際には遊びに行ってみてくださいね！

たるーの島唄コラム 第十二回 シマウタと星

「星に願いを」と言えばご存知ディズニーマニアの「ピノキオ」というアニメ映画の主題歌。ロマンチックに「願いはきつとかなうよ」と励ます歌だ。しかし都会では空気の汚れや街の明かりさでもう星も見えず、願いも届かないかも知れない。ならば、沖縄の星にまつわるウタでも眺めてみようか。

よく知られている「ていんさぐぬ花」という曲には次の歌詞がある。
「夜走らず船やニヌファ星目当て
我んちえる親や我んど目当て」
（意味）夜の海を渡る船は北極星を指標にしている。私を産んでくださった親は私の成長を見守っている。
子（にー）の方向（ふぁー）つまり北の星、北極星（ニヌファブシ）はいつも北を指しているので昔は航海する船にとっては貴重な星だった。

少し紹介しよう。宮古島を船が出港して、星を目当てに進めと歌う。ベガサ星座、すばる星群、ぎょ車座星群を次々と天に仰ぎつつ方向を変え、そしてシリウスが上がり、明の明星を見る方向に船を進めると太陽が上がる那覇港に着くことある。なんと一晩で着いてしまうから驚きだ。

星々は航海や農業、そして遊びにも必要なものでありシマウタに受け継がれてきた。モーアシンビ（野遊び）では若

者たちが原っぱで明け方まで過ごす「天の川」（ティンガール）を見て帰る時間を知るのだった。夜中3時頃は天の川は横に見えるのでこんな遊びウタも生まれた。
「さらば天の川や島横になとイヤリクヌでいちやよ立ち戻ら 昨夜の時分ハラユイユイ」（赤山）
（意味）さらば天の川が村の上で横になっている。さあ家に戻ろう 昨夜と同じ時間に。
星々は航海や農業、そして遊びにも必要なものでありシマウタに受け継がれてきた。

宮城生まれ。広島在住。琉球民謡協会教師。ネットでおなじみの「たるーの島唄」の著者。島唄の歌・解説を10年以上、広島で三線教室や「OCC」集報バンドを主宰。

しりとり系コラム
ちんだみ日和12
た……？
よしゆき[名前]
た……？

ええと
ここで
自己紹介
などを……
昭和四十年四月
東京都の下町に生まれる。
幼少より音楽が好きで
三歳でピンキーとキラーズ
『真っ赤な太陽』を熱唱。
五歳でピアノ
を習い
始める
オラ
芸大さ
行くだ！
近所で
「ベートー
ベンの再来」
などとおだてられ
本人もすっかりその
気になる。

小学校に入学。
四年生のときに担任となった
井上先生が大変音楽好きで
どうでもいい
話ですニヤ！
沖縄関係ないし
トットトット
ここからか
面白いのー！
あつ、待つて！
まだ導入部分
やし！
たーやが？
（誰？）

た……？
よしゆき[名前]
た……？



また、ヤールが笑っている。大城密
おおひろひそか 那覇市出身、東京都在住。
「スマホ小説大賞 2014」にて『私アブリ』が角川ホラー文庫賞を受賞。『第2回ノベリスタ大賞』にて『EGGMAN』が準大賞を受賞。2017年『下町アパートのふしぎ管理人』シリーズが角川文庫より刊行されている。

今夜は月に一度開催される、自由参加の三線ライブの日だ。僕が働く沖縄料理店の店内は客と素人ミュージシャンで溢れ、キッチンはお客で溢れていた。もちろん数人はプロ級の歌い手もいるがほとんどは趣味の範囲内といっているだろう。ほら、また歌詞が飛んだ。そして間を埋めるように笑い声。
「六番テールのデビチ煮まだ？ おっさんがせかしてくるんだけど」
「ホール係のマキさんが伝票片手にキッチンへ顔をのぞかせる。」
「……い、いま煮込んでます。あと一分くらいかな」
「分かった。急ぎでお願い」
「は、はい」
大根と昆布とともに雪平鍋で煮込まれているテラテラに光るデビチを見つめた。茶色い煮汁に浸かりながら揺れるその姿はなぜか可愛らしい。

今日は僕と同じ沖縄出身で先輩の平良さんというバイトの二人と店長がキッチンのメンバーだが、ライブの日に限っては店長は客に囲まることが多く、実質一人でオーダーをさばっているようなものだった。平良さんは、急に大量に入った沖縄そばのオーダーに悪戦苦闘している。こちらのソキの準備は万端なので、冷めないうちに是非急いで出さないオーダーの数は作っても作っても減ることはなかった。それをどう処理するかは問題だったが、僕にはもう一つ大きな問題があった。
「三番テールのグルクンの唐揚げも出てないみたいだけど、どうなってる？」
またマキさんだ。一つにまともな揚げた長い髪の毛を揺らしながら今度はキッチンの中まで入ってきた。僕の顔を汗の臭いが分かるほどの間近で見た後、キッチンの状態を見渡した。
「僕の問題は彼女だ。」
クルル君。まだグルクンを油に入れてもないでしょ？ もう少し時間かかるけどいいお客さんに確認してくるね」
僕の返事待たずにマキさんは再び狂乱の三線が鳴り響く戦場へ駆け込んでいった。

僕はこの店で「クルル君」と呼ばれていた。店長が無口であり喋らない僕に、沖縄の県魚である、赤い魚のグルクンとかけた、しょうもない駄洒落のあだ名をつけた。それは一気到店員全てに普及し、いつしか常連客を僕もそう呼ぶようになった。僕はそのあだ名をすぐに拒否しなかったため、それ以降本来の名前で呼ばれることは皆無になった。ただ僕はそんなに無口でクルルというわけでもない。
無口になったのはこの店にマキさんがいたからだだった。僕は初めて彼女を見てから自分が出せなくなっていた。まるで自分が恋の深海にとどまはまったようだった。彼女が働いている日決まって仕事も手につかなかった。それでも何とか他の人になれるようにしていたが、それも恋の海に溺れてしまった。僕のただの足掻きでしかなかったようだ。僕の気持ちとはう僕はあの日思い出しながらグルクンに塩と片栗粉とまぶし、油の中へと泳がせた。

僕にとって事件は数日前に起こった。事件を起こしたのはマキさんだ。
「クルル君」
「……はい。何ですか」
仕事終わりに一人控えて着替えてようとしていた僕に話しかけてきた。僕は自分の体温が急激に上がるのを感じた。
「あ、突然なんだけど、私は店長とは違う意味でクルル君のことをクルル君と呼んでいるって知ってた？」

最初マキさんが何を言っているのか僕には分からなかった。
「クルル君ってさ、どうして私と話すときだけ、顔が真っ赤になるの？」
「え？ そう、ですか……」身に覚えがありすぎて、うまく憶へることもできない。
「結構前に店長から教わったんだけど、みんなが見ているグルクンって赤いけど、海の中では綺麗な青緑色なんだよね？」
「……はい。確か、海の中の青色は敵から身を守るためのカモフラージュです」
「ふん」

マキさんと二人きりの緊張で無言に耐えられない僕は聞かれてもいないことを続けて答える。
「グルクンは釣り上げられて死んだときと、興奮しているときと、眠っているときに体が赤くなります。それはつまり、青い方ではなく、赤い方がグルクンの本来の姿」
「クルル君は私と話しているとき眠っているの？」
「いや、そんなことは」
「死んでます？」
「生きてます」
「もしかして、……興奮してる？」
僕はその問いかけに答えることができず息を詰まらせる。
「おかしいな。顔真っ赤だよ」
「いや、それは」
「あ、さ、今度の土曜日はバイト終わり空いてる？」
「今度、えつと今度の土曜、えつと」
三線ライブの日だよ。終わったら私と一緒に飲みにいきませんか？ クルル君

マキさんはそう言うて笑った。
僕は突然彼女に釣り上げられ、見えないう青空を見てしまい全身を真っ赤に染めてしまった。

店内の喧嘩がさらに盛り上がったとき、僕はあの日の回想から現実へと帰ってきた。
客に呼ばれた元氣な返事をするマキさんの声が三線の音色の間に割って入る。
オーダーを早く終わらせなきゃ。

僕は独り言のように呟いた。
ふと見ると揚げ油の中のグルクンが、今世最後の応援とばかりに、僕へ胸びれを振っているように見えた。



毎月沖縄をテーマとした3分で読める読み切り超短編小説シリーズを掲載！次回からは海開き！お楽しみに！